目次

第一章 花の薬師は海を渡る 004
第二章 リンデンの木の下で出逢う 074
第三章 盗人騒動と新たな生活 129
第四章 霊孤泉の清らかな湧水を求めて 207
第五章 交差する思惑 260
後日談 花の薬師は初夏の風に思いを馳せる 318



この物語はフィクションです。
実在の人物、団体等とは一切関係がありません。

第一章　花の薬師は海を渡る

大陸の東端を越えて海を渡れば、私たちが住む西側諸国エウロパとは異なる独自文化を築いた島国へと辿り着ける。豊かな自然と未知の動植物が生息し、輝く景色はまさしくワンダーランド。東洋の神秘を感ぜずにはいられない。気づけば、私は輝きに満ちた不思議の国、恒和国の虜になっていた。――学生の頃、植物学者ストックリーの旅行記に綴られた言葉は、私を夢中にさせた。

綺麗なドレスや宝飾品で着飾って社交界で微笑む生活よりも、東洋に浮かぶ島国で野山を駆けまわった方が、きっと何倍も充実した日々だろう。

いつか私も恒和国に行きたい。

王立学校を卒業してから二年、変わらず『ストックリー旅行記』を毎夜のように捲って、憧れを募らせ続けた。そんなある日、お仕えするランドルフ侯爵夫人ロゼリア様からお茶の席へと招かれた。

優雅なドレス姿のロゼリア様の微笑みに、緊張を覚えずにはいられない。

ロゼリア様は完璧な淑女だわ。多くの令嬢が羨望の眼差しを向ける美貌だけではなく、培われた教養や品位が輝きとなって溢れている。私との年の差がたった七つとは

思えない完璧さ。こうして個人的にお茶のお誘いを受けるのは光栄で、きっと誰もが羨むことだろう。

でも今、私の鼓動が速まっているのは、ロゼリア様の美しさを前にしているからだけではない。

「マグノリア、新しいハーブティーとても美味しいわ。いつも、ありがとう」

「お口にあったようで、何よりでございます」

「マグノリアのお茶は本当に優しいわね。飲むと体がとても軽くなるわ」

ロゼリア様は微笑んでカップを静かに受け皿へ下ろすと、窓から吹き込む爽やかな風を吸い込むようにして、瞳を閉ざされた。何をお考えなのだろうか。

沈黙が痛いほど胸に突き刺さり、背筋をつと汗が滴り落ちた。

このお茶会は何かあると囁くように、窓の向こうで庭木がさわさわと音を立てる。

「ねえ、マグノリア。次の春で貴女は十八ね。そろそろ結婚を考える気はないの？」

沈黙を破った声に、ほら来たと言いたくなるのを、ぐっと堪えた。

私はプレンティス子爵家の四女。

地方役人の父はランドルフ侯爵家の庇護下で、領地の一角を任されている。年の離れた兄が父の跡継ぎとして屋敷にいるが、姉三人はすでに諸侯へ嫁いでしまっている。

貴族の娘は王立学校を卒業したら嫁ぐのが世の常。どんなに遅くとも、十五歳にも

なれば婚約者がいて当然とされるし、十八歳を迎えても婚約すら結べないと社交界で悪い噂も立つ。

つまり、十八を前にした私は、嫁の貰い手がない行き遅れ令嬢のレッテルが貼られる瀬戸際なわけだ。

学生時代、縁談がなかったわけではない。薔薇色の髪が華やかなこともあって、よく声をかけられたし婚約の申し入れもあった。だけど、私が「いつか恒和国へ行きたい」と夢を語ると、誰もが離れていった。

結婚したら伴侶を助けて家を守る。子を成して国を盛り立てる。それが当たり前のことだろうとばかりに、私の夢は笑われた。

夢を追いかけて何が悪いのよ。夢を見せてくれない男に、どうして愛想を振りまかないといけないの。そう尋ねてみても、親ですら「お前は貴族の娘だ」としか答えなかった。積もり積もった疑問に答えられる人物が現れることはなく、当然のように結婚への憧れも塵一つ生じなかった。学生時代の縁談がことごとく失敗したのも当然よね。

ロゼリア様の侍女兼薬師として勤めて二年目になる。この平穏な日々がいつまでも続けばいいと思っていた。でもついに、ロゼリア様直々に縁談の話をされる日が来たのだ。

できることなら断りたいが、覚悟を決めなければならないのだろう。

溜め息をぐっと堪え、ティーカップの中身へと視線を落とす。

琥珀色のお茶が陽射しを浴びてゆらゆらと煌めいた。それはまるで、私の心を表しているようだ。

ロゼリア様が優しく私を呼んだ。

「マグノリア、お母様に手紙の返事はしているのかしら？」

「……いいえ」

「そう。私宛で、貴女を心配する手紙が届いたのよ。修道院に入れた方がいいのかと」

突然のことに鼓動が跳ね、弾かれるように顔を上げていた。

もしかしたら、私は縋るような眼差しをロゼリア様に向けていたのかもしれない。

そこには、困ったように微笑むロゼリア様の美しい双眸があった。

わかっている。

ロゼリア様は私を責めているわけではない。心配してくださっているだけだ。でも、その優しさと穏やかな声は私の心を抉るように深く刺さった。

「できることなら、このままロゼリア様の薬師としてお仕えしたいです」

「我が家に仕える侍従や騎士の伴侶となるなら、お母様も貴女が働き続けることを反

対されないと思いますよ」

静かな提案に、しまったと心の内で叫ぶ。

確かに、ランドルフ侯爵家に仕える方の伴侶となれば、仕事は続けられる。続けられるけど、それはここから出て恒和国へ渡る夢を諦めるも同然。

目の前が真っ暗になっていく。

カップの持ち手にかけた指先が震えた。受け皿とカップがぶつかりあい、小さな音がカチカチと空気を震わせる。

働けるだけでは駄目なの。どんなに敬愛するロゼリア様の薬師として働けても、夢を捨てるなんてできない。我が儘だと言われても、今は嫁ぎたくない。

「マグノリア？」

「申し訳ございません、ロゼリア様。私の夢を理解してくださる方がいるとは思えません」

「……恒和国に行きたいという話ね」

「はい。貴族の娘として褒められたことでないと、わかっています。それでも私は……どうしても、海の向こうが見たいのです！」

お世話になってきたロゼリア様から薦められる縁談なら、断るわけにはいかない。頭ではわかっているけど、気持ちに嘘はつけない。

私はどうしようもなく恒和国に憧れている。

ストックリーが愛してやまなかった景色を眺め、まだ見ぬ花々、薬草の数々に触れてみたい。海の向こうで、私たちとは異なる文化を送る人々を知り、異なる言語に触れ、ストックリーが恒和国の武士と送った日々を私もすごしてみたい。

童話に憧れる子どもみたいだと笑われても、この夢を否定する人と、私は夜を共になんてできない。

ロゼリア様を落胆させてしまうだろう。それでも、嘘偽りを口にすることはできなかった。

「申し訳ございません」

私が頭を下げると、ロゼリア様は溜め息をつくように小さく息をついた。

「それでは、恒和国に行くのはどうかしら？」

「……え？」

「恒和国に滞在している薬師が一人、帰国を望んでいるそうよ。その代わりになる薬師を一人、次の船に乗せようかと話が挙がっているの」

私を真っすぐ見るロゼリア様は「悪い話じゃないと思うのだけど」と言いながら優しく微笑んだ。

「え、でも……女の私でも、いいんですか？」

「いいわよ。ランドルフ侯爵家の商団は、能力ある者なら誰でも歓迎するわ。マグノリアのハーブティーは本当によく効くもの。推薦しましょう」
「ロゼリア様、ありがとうございます！」
「ただし、期限を設けます」
「……期限？」
慈愛に満ちたロゼリア様の表情が一転、厳しいものになった。
「そうです。貴女を恒和国へ送り、向こうの商館で働く場所を用意することはできます。でも、それはいつか国へと戻る前提の話です」
国に戻る前提と告げられ、体が硬直する。
植物学者でありながら子爵の称号を持つ軍医であったストックリーも、国に戻されている。当時、戦争が危ぶまれての帰還命令だった。日誌に切々と綴られた恒和国に残りたいという思いは、何度読んでも胸が苦しくなった。貴族は国から逃れることはできないのだと、突きつけられた気さえした。
そう、私たち貴族は国のために存在する。戻れと命じられたら、戻らざるを得ない。
「それでも行きたいです！　行かないで何も知らないまま夢を捨てるなんてできません！」
「わかりました。では五年、貴女を恒和国のドワイト商館へ預けるよう、推薦状を書

きましょう」
ロゼリア様は静かに告げ、再びカップへと手を伸ばした。少し冷めただろう中身を一口飲み、穏やかな吐息をつくと「本当に美味しいわ」と囁いた。
柔らかな風が窓から吹き込み、私の前髪を揺らした。
「このハーブティーが飲めなくなるのは寂しいけど、貴女の成功を祈っているわ」
「……ありがとうございます！」
咄嗟に立ち上がったことで椅子がガタッと音を立てた。だけど、そんなことは些細なことで気にもならなかった。だって、ついに恒和国への渡航チャンスを掴んだのよ。頭と胸が期待と喜びでいっぱいになっても仕方ないわ。
ついに、憧れの恒和国へ行ける！
「落ち着きなさい、マグノリア。はしたないですよ」
「は、はい。申し訳ございません」
「ふふっ。貴女の好奇心は誰も止められそうにありませんわね」
カップを下ろされたロゼリア様は、ほっと安堵するように肩の力を抜いた。
「これで、先方に断りを入れる理由になって、よかったわ」
「どういうことですか？」
「貴女に来ている縁談だけど、少し問題のあるご子息でね。断った方がいいのではと、

旦那様と話していたの」

「お気を使わせてしまい、申し訳ありません」

「謝ることはないわよ。学生時代も入れたら、もう五年の付き合いでしょ。マグノリアは私の妹も同然。幸せになれない結婚を勧めるなんてできないわ」

「ロゼリア様……あの、差し支えなければ、どちらからお話があったのか伺ってもよろしいでしょうか？」

「そうね。断る理由も見つかったことだし、話しておきましょう。貴女に縁談を申し入れたのは――」

真剣な面持ちとなったロゼリア様が口を開くと、強い風が吹き抜けた。

窓の向こうで激しく木々が揺れ、窓枠がガタガタと音を立てる。吹き込んだ風がカーテンを大きく揺らす姿はまるで、その名を口にしてはならないと言うかのようだった。

ロゼリア様の赤い唇が、その名を告げた。

「スタンリー辺境伯家次男、ヘドリック・スタンリーよ」

衝撃が走り、息を呑んだ。

だって、スタンリー辺境伯家次男といえば、女癖が悪いことで有名な放蕩息子よ。恋に興味のない私だって、悪い噂の一つや二つ聞いたことがある。婚約者がいないのをいいことに花街で遊び歩いているとか、幾人もの令嬢に睦言を囁いているだとか。あまつさえ庶民の娘に手を出し、酷いことをしているなんて噂まである。

貴族令嬢の間では、結婚したら幸せになれない男ランキング堂々の一位と囁かれる男だ。それでも、スタンリー辺境伯家は名家だから、ヘドリック・スタンリーの周りに女性が絶えないという不思議な話もあるのだけど。

子爵家の娘である私は迫られたら断れない相手だし、お母様が聞いたら辺境伯家と繋がりができると大喜びするに違いない。

この話が、ランドルフ侯爵家を通したものでよかった。恒和国への渡航チャンスを得たことにいっそうの喜びを覚え、この幸運を心から神に感謝した。

「スタンリー家との関係を壊さずにどう断るか悩ましく思っていたのよ。穏便に貴女を逃がせそうで、よかったわ」

「本当にありがとうございます。全力で恒和国へ逃げます！」

拳を握って決意を告げた私は、この三ヵ月後に恒和国へ降り立った。その頃には、すっかりヘドリック・スタンリーのことを忘れていた。

ついにやってきた。植物学者ストックリーが訪れて不思議の国と称した東洋に浮かぶ島国、恒和国！

潮風に乗って届く木材や土の香りが、久々の陸地を感じさせてくれる。

下船の許可が出るのを待つ傍ら港を眺め、脳裏に書物で見た恒和国の風景画を思い描いた。ここがストックリーの恋焦がれた国だと思えば、魚臭い潮風も感慨深いものね。

風に揺れた前髪を押さえ、堪えようのない喜びが口元を緩めた時だった。

「おいおい、またマグノリアがあっちに行ってるぞ」

「東洋かぶれは、手に負えないな」

「せっかくの美人でも、あれじゃ願い下げだよな」

「縁談を断ったって聞いたが、断られたの間違いだろうよ？」

口さがない男たちが、私をバカにする言葉が聞こえてきた。だけど、そんなことは些細なことだ。

どれほどこの日を待ち焦がれ、船旅に耐えてきたと思っているのか。今更、どうでもいい男たちの陰口なんて、羽虫の音みたいなものだわ。

船員の男たちから視線を逸らし、磯の風を胸いっぱいに吸い込んだ。

目の前に広がる港町は、恒和国が国外に開いている数少ない港の一つ、日乃出港。

大きな河口にある小さな島のような地形を見るに、三角州を整備した場所だろう。その名に違わず、美しい日の出が見られる名所らしい。今から朝を迎えるのが楽しみだわ。

港を行き交う人々の服装は、書物でしか見たことのないものばかりだ。女の人の姿が少ないようにも見えるけど、男女ともにエウロパでは馴染みのない衣裳を身にまとっている。あれは確か、小袖と袴ね。ズボンに見えるあっちは、確か股引といったかしら。

書物で見てきた絢爛豪華な絵よりも、慎ましやかな色のものを着ている。エウロパのような華やかさはないのに、人々が行き交う様子は活気に満ちているし、賑やかな掛け声や笑い声が聞こえてくる。期待は増すばかりだ。

月代といったかしら。頭頂部を剃る髪形をしていると、ストックリーの書物に書いてあったけど、全員がそうではないのね。

船の上から港を行き交う人々を観察していると「マグノリア様」と私を呼ぶ声がした。

振り返ると、私の手伝いをするため船に乗ってくれた侍女のエミリーが、顔面蒼白で走ってきた。

「どうしたの、エミリー？」

「サムライはハラキリをする野蛮な種族と聞きました」
「……は？」
「突然、斬りかかってくる恐ろしい種族だと！」
「誰がそんな出まかせを言ったのよ」
今にも泣き出しそうなエミリーを見て、思わず溜め息をつく。
エミリーはおずおずと走ってきた方を振り返った。そこには、航海の間中エミリーに付きまとっていた男の姿があった。逃げられた腹いせに彼女を脅したのだろうか。あるいは「俺の側にいれば安全だ」などと口説いたのかもしれない。
「出まかせ、ですか？」
「当然よ。サムライ――武士の教育は私たちの文化にも引けを取らない素晴らしいものよ。理性もあるし、とても賢明で正義を愛する人たちなの。女を脅して自分のものにしようとするような人の方が、よっぽど野蛮よ」
「では、外を女の人が歩いていないのは、男の人が乱暴を働くからではないのですね？」
「そんなのは全くの嘘ね！　恒和国は女性が少ないだけよ。女性は国民の三分の一らしいから、むしろ、女性を大切にしているわ」
港を指差して説明すると、エミリーはほっと安堵の息をついた。

女性は普通に市中を歩いているし、店を持つ女性だっている。むしろ、エウロパ諸国よりも働き者が多いって、ストックリーも書き記していたわ。
「知らない異文化に触れるのは怖いことかもしれないけど」
言葉を切って潮風を吸い込み、エウロパの港町とは異なる景色を指差した。そこには見慣れない木造の建物が並んでいる。エウロパの石やレンガ造りと異なり、低層の木造建築が整然と横並びに続いていた。
この国の姿がエウロパと異なるのは、何も建物に限ったことではない。
「恒和国はエウロパよりも小さな島国だけど、それでも何百年と小国が争いを続けていたの。それが統一されたのが。今から二百五十年前のこと」
「国を統一……エウロパはまだ小競り合いが多いのにすごいですね」
「でも、長い戦乱の後は国力が弱っているものよ。そこで国を安定させるために、国外との交流をほとんど絶ったの。だからこそ、恒和国独自の文化ができたのよ」
「ハラキリもですか？」
「そうね。私たちには理解できない文化もあるわ。切腹（ハラキリ）は元々、自身の潔白の証明だったそうよ。何も企みはないとか、君主への忠誠を信じてもらうための最後の手段となったの。それが定着するほど、この国の戦乱は長かったのよ」
何百年と続く争いの中、恒和国の人々は腹の中を物理的に見せることで、魂の証明

を行おうとしたのだ。そうストックリーの旅行記にも書かれていた。
「自ら命を絶つのは罪ではありませんか？」
「エウロパの神は赦されないでしょうね。でも、ここは恒和国よ」
「……そうでした」
エミリーはどこか釈然としない顔のままだ。正直な話、私もまだ切腹の美学みたいなものは理解ができない。だけど、いつかその本質を知りたいと思う。そのためにも恒和国の人々と交流して、その心に触れてみたい。
「安寧の世が訪れた恒和国は、国を閉ざしたことで独自の文化が生まれたの。ほら衣裳を見て。私たちの服装とは全く違うでしょ。衣裳だけじゃなく、言語、文字、絵画、音楽、あらゆる文化が私たちと違うのよ」
恒和国にあるのは、つらく悲しい歴史だけではない。むしろ、厳しい時代の後に花開いたものがたくさんある。それを、私はストックリーの著書で知った。残された言葉やスケッチでしか見ることの叶わなかった景色が、今は目の前にある。これが私の求めていた景色、私の生きる新しい世界！
「見て、エミリー。恒和国の人々の笑顔を。彼らが不幸に見える？」
「いいえ。とても、楽しそうです！」
「そうでしょ！　恒和国では他国の船が入港できる場所が決められているの。ここ、日乃出港がその一つ。栄海藩」
「栄海……はん？」
「藩は領地を意味する言葉よ。その栄海藩で最も活気があるのが、この港なの」
「だから、行き来する人も多いのですね」
「そうよ。いろいろ知るとワクワクするでしょ？　せっかく恒和国に来たのだから、エミリーも友人の一人でも作るといいわ」
「で、でも……恒和国の言葉は難しいです」
「それは同感ね。私もそこだけが心配なのよ」
文献を読み漁り、恒和国を訪れたことのある薬師からいくらか語学講習を受けた。ある程度、日常会話くらいはできるだろうと励まされたけど、実際はどうだろうか。
「……五年」
「マグノリア様？」
「私に許された時間は、五年。その間に、必ずここで生きるための道を探さないと」
船に乗る前、ロゼリア様は、滞在期間を延ばせるよう、できる限りの手を尽くそうと約束してくれた。だけど、確約できるのは五年だとも言っていた。つまり五年後、私は自分でお金を稼げるようになるか、出資してくれる新たな後ろ盾を恒和国で見つけなければ、強制送還もありうるということ。

本の中でしか知りえなかった世界で、いつまでも浮わついてはいられない。この感動をただの思い出にしないためにも、もっと恒和国を知らなければ。

好奇心に胸の高鳴りを覚えながら、祈るように手を握りしめた時、急な呼び出しがかかった。すぐさまエミリーを伴って艦長室へと赴くと、数名の武士に出迎えられた。鋭い眼差しが私たちに向けられる。入国審査をする役人たちだろう。

「そなたが、まぐのりあ・ぷれんてす、か？」

恒和国の人が発した声を初めて聞き、胸の奥がじんっと震えた。発音の違いはある。それでも、私の名前が呼ばれたことくらいはわかった。

あぁ、なんて感動だろうか。早く、通訳を介さないで会話ができるようになりたい。感動に震えるあまり、短い返事すら忘れていた。すると、役人は言葉が通じないとでも思ったのか、眉をひそめて低く唸り、通訳を交えて早口で話し始めた。

どうしたことだろう。彼らとは明らかな温度差を感じる。何か入国の手続きで問題があったのかしら。

首を傾げて艦長を見ると、こちらも困った顔をしている。

「女子が来るとは聞いていない」

「出港前、予定の薬師が体調を崩しましてな。その代理です。若いですが腕は彼を凌ぎます。マグノリア、挨拶を」

恰幅のいい我らが艦長は、口ひげを撫でながら私を呼んだ。

「マグノリア・プレンティスと申します」

「若い女子が、薬など作れるのか」

なんと言っているか聞き取れなかったが、役人の表情から見くだされているのだとすぐに察した。

通訳へ睨むように視線を送ると、淡々と恒和国の言葉を訳してくれた。それが余計に腹立たしく感じ、気づけば語気を強めて返答していた。

「作れます！」

バカにしないでちょうだい。

遊びで長い航路を越えてきたわけじゃない。ランドルフ侯爵夫人の顔に泥を塗るようなこと、するわけないじゃない。

にっと口角を上げ、携えていた厚い本を差し出した。

役人は一瞬それに手を伸ばしたが、受け取るのを躊躇する。恒和国の人は警戒心が強いと聞いていたけど、本当のようね。

そんなに恐れなくてもいいのに。

ちょっと分厚いけど、表紙を開いたら武器や魔物が飛び出すなんてことはない。この本はいたって真面目な私の研究記録書だ。

「こちらに記しているのは、私の研究する薬のレシピになります」
「れしぴい？」
「はい。日々研究をしております」
笑みを絶やさずにいると、役人は困り顔のまま再び通訳と話し始めた。
帳面にございますとか、なんとか言っているのがかろうじて聞き取れた。
想像以上に早口だわ。会話の講習をしてくれた方が、どれだけ丁寧だったか痛感するくらいには難解だ。耳が慣れるまで、専用の通訳がいないと会話もままならないかも。
役人は難しい顔をすると、渋々といった様子で私の本を受け取った。そうして、ページを捲ろうと指で触れた。その瞬間、私の目にだけ、彼の肘がぽうっと火を灯したように明るく光って映った。
ラッキーね。これなら、彼らに私が薬師であることを証明できる。
この本から武器や魔物は飛び出さないし、魔法を唱えるための魔導書の類でもない。その代わり、触れた者の病や怪我、心身に支障をきたしている箇所がわかる仕組みになっている。エウロパでは珍しくない、魔力感知の魔法を組み込んで改良された魔法道具だ。
この役人は、どうやら肘のあたりを打撲しているようね。この光り方は初期処置がずさんで、後遺症が残っているタイプだわ。
「お役人様、左の肘を怪我されていますか？」
私の言葉を通訳が伝えると、偉そうな役人は驚きに顔を強張らせた。どうやら隠しているようね。うまく誤魔化したって、バレバレですよ。
「むっ、なぜそれを？」
「ははははっ！　一流の薬師にもなれば、気づくことですよ。マグノリア、薬を差し上げなさい」
艦長が機嫌よく笑ったことで、役人は訝しげに私を見たまま黙った。
どうしてわかったかは説明に困るところだから、笑い飛ばしてくれた艦長に感謝しないとね。
「この傷は残ると聞いておる。今更、軟膏で治るとは思えん」
「恒和国の薬もよく効くと聞いていますが、私の薬は特別製です。朝晩、丁寧に洗った後に塗り込んでください。三日もすれば改善がみられるでしょう」
「三日？」
通訳が私の言葉を伝えると、役人たちがざわついた。
小声で話す彼らの言葉を聞き取るのは、さすがに難しいわね。でも「信じられない」とか「嘘だ」みたいな、疑わしい反応だっていうのは理解できた。

荷物の中から出した傷薬を差し出すと、役人は懐疑的な目を向ける。

調べたところで、何もやましいものは出ないわよ。そもそも、ここで役人に毒を盛ってもメリットは一つもないってことくらい、考えればわかるでしょうに。

胡散臭いものと思われたみたいだけど、さて、どうしたものか。

私の作る薬は魔法で素材の分解と生成をしている。そこに回復魔法を物質化した薬液も添加しているから効能は間違いないのよ。軽いケガや炎症なら、短時間で回復することもできる。

三日で効果が出るって言ったけど、たぶん、今夜使えば翌朝には違いがわかると思うわ。

エウロパでは珍しくない魔法薬なんだけどね。どうやら、恒和国では知られていないようだ。もしかして、ここには魔術師がいないのかしら。

検分がさらに進み、積み荷にも不審なものがないとわかるまで半日かかった。そうして、日乃出港のほど近くにある異邦人の町――関外町での生活が、なんとか無事に始まった。

翌日、日の出とともに目を覚ました。

ベッドの上で、ぼんやりと船上ですごした約三ヵ月を思い出していた。

東洋被れと笑われたり、エミリーを追いかけ回す男を追い払ったり、そこそこ面倒なこともあったわ。それでも、魔法で制御された高速で進む大型船舶は、揺れも少なく快適な船旅だった。

でも、地に足をつけ、揺れない寝床で横になるに越したことはないわね。

新しい生活の場となる商館は港からほど近い関外町の中央に位置している。その敷地に、私たちの居住区もある。建物は故郷を思わせる石造りで、商館の中にある調度品までエウロパ仕様だわ。畳と布団というのを体験してみたい気持ちもあるけれど、しばらくは航海の疲れを癒やしたいから、慣れたベッド生活がありがたいわ。

背伸びをしながら体を起こし、ベッド横の窓へと歩み寄った。まだ朝日が昇って早いからか外は静かなものね。開けた窓から、ほんのりと潮風が流れこんだ。深く吸いこんだ息は、無意識に溜め息となって零れ落ちる。

胸の内にあるのは期待ばかりではない。

恒和国で後ろ盾を得るといっても、何をしたらいいのかしら。

私が身を置くこの商館は、恒和国と国外交易を行う大きな商会の拠点。ここで働けるだけでも、おそらく、恒和国の人と交流を持つことができる。

ただ、私が求める後ろ盾を手に入れるなら、それ相応の身分をもつ武家と繋がらないといけない。エウロパでいうところの侯爵家以上の階級となるとなかなか骨が折れ

そうだわ。

きっと、ただ働いているだけでは無理ね。

カーテンを留めながら、窓の向こうに広がる中庭を見渡した。ずいぶん広い庭にあるのはハーブ畑だ。商館で扱う魔法薬の材料を栽培しているのだろう。

ぼんやり眺めながら、昨日出会った役人たちをふと思い出した。お堅そうな彼らも刀を持っていたから武士なのだろう。でも、言葉はいまいち通じなかった。恒和国にも、通訳ができる人がいるって聞いていたけど、まずはその人たちと仲良くなる必要があるわね。

「私の言語能力じゃ、心もとないもの……」

ドワイト商館長に頼んで紹介してもらおうかと考えていた時、ドアがノックされた。どうぞと入室を促すと、メイド姿のエミリーが元気に入ってきた。

「マグノリア様、おはようございます！　お着替えを手伝いに参りました」

「おはよう。今日はお休みでしょ？」

「商館のお仕事はお休みを頂きましたが、マグノリア様のお手伝いは別でございます！」

「気にしなくていいのに。自分で着替えもできるわよ」

クローゼットに歩み寄りながら笑うと、エミリーはぷうっと頬を膨らませ、小走りで側へ近づいてきた。

「その件について、申したいことがございます」

「何かしら？」

「マグノリア様……どうしてドレスをほとんどお持ちにならなかったのですか！」

涙目のエミリーは勢いよくクローゼットを開け放った。そこに並んでいるのは、紺や茶色のパンツとシンプルなブラウスばかり。派手なドレスは一枚もなく、深緑と臙脂色のドレスが一着ずつ下がっているだけだ。

「しかも、ドレスはこのように地味な色のものがたったの二着！」

「公式の場ではドレスを着ないといけないと言われたから、一応ね」

「一応ね、ではありません！　せっかくの美貌が台無しではありませんか」

「美貌って……でも、男装の方が動きやすいわよ」

「そういうことではございません！」

文句を言いながらも、エミリーはてきぱきと動きブラウスをハンガーから外した。

一人で着替えられると言っているのに、着替えを手伝いたがるんだから困ったものだ。スカーフだって自分で結べるのに、すぐ解いて結びなおそうとする。

「着飾るのは好きじゃないの」

着替えを終え、鏡の中に映しだされた自分の姿を見る。

紺のパンツに白のブラウス。それに合わせた紺のベストという格好は、まるで執事のようだと母が嘆いた姿だ。お洒落といえるような装飾品は、首元を彩るスカーフを留めているエメラルドくらいだけど、これくらいの方が仕事をするのに丁度いいのよね。当然、男受けも悪いから、作業の邪魔もされない。

「それに、恒和国は煌びやかな格好をよしとしないそうよ。派手なドレス姿で外を歩くのは失礼に当たると思うのよね」

「ドレスを着ない口実ばかり並べないでください！」

嘆くエミリーに、ごめんねと返して笑顔で誤魔化した。

ドレッサーの前に座り、置いてあった髪の結い紐を手に取る。それを使って、さっとまとめた髪を一本に結ぼうとした時だった。

鏡に不満そうなエミリーの顔が映り込んだ。

「せめて、もっと華やかな色のものをお召しになってください。紺は地味すぎます！」

「エミリーの服だって紺じゃない。それに、恒和国は質素倹約こそが美徳とされてるのよ。地味なくらいがいいのよ」

「ぐぬぬっ……それなら、髪を編んで飾りましょう！」

「飾り立てたら邪魔でしょ」

「髪を飾るのがお好きでないのも存じておりますが、無造作に結ぶのは、よろしくないです！」

失礼しますと言って、私の髪に触れたエミリーは結い紐を取り上げた。

鏡の中で艶やかな赤毛がふわりと広がる。

幼い頃から、まるで薔薇のようだと褒め称えられてきた赤毛だけど、私にはその価値がよくわからない。そもそも、長い髪なんて邪魔でしかないもの。

「マグノリア様、あまり引きつめて結ぶと、禿げますよ」

「それはさすがに嫌ね。結ぶのも面倒だし切ってしまいたいぐらいよ」

「駄目です！　こんなに豊かで美しい髪を切るだなんて！」

「……皆そう言うけど、そんなにいいものじゃないと思うのよね」

鏡に映る姿を眺めながら、ふと幼い頃から私の髪を大切にしてきた母を思い出した。ブラシで髪を梳くたびに、美しさを褒め称えていた。

今の私が理解できないんだもの、幼い頃はもっとだった。

髪ばかり褒められるのが、子ども心に不愉快だったのかもしれない。小さな反抗心からか、自ら髪をハサミで切り落としたことが一度だけあった。十歳の時、いつも穏やかな母が泣きながら怒ったのを見たのも、あの時が初めてだった。恒和国へ行くと連絡した時だって、あそこまで嘆いてはいなかったくらいよ。

幼いながら、髪を振り乱して怒る母に狂気すら感じた。勉学に邁進（まいしん）してもいいから髪を切ってはならない。今思い出してもよくわからない交換条件だわ。それを守って、嫌々ながら髪を伸ばしてきたおかげで恒和国まで来れたのかと思えば、無駄ではなかったと言えるけど。

「もしも私一人になったら、この髪に困るわね」

「一生お仕えいたします！」

「エミリーはランドルフ侯爵家の侍女だもの、国に帰ったらそうはいかないでしょ」

「でも、マグノリア様はこちらに残ろうとしているんですよね？」

「まあ、そうだけど……え？」

「一生お仕えする覚悟で参りました」

鏡の中で、白いリボンが薔薇色の髪に編み込まれていく。その様子をぼんやり見ていたけど、突然の宣言に驚きすぎて、思わず後ろを振り返りそうになった。

エミリーが静かに「動かないでください」と言うから振り返るのを思いとどまっただけど、今すぐ彼女の考えをきちんと聞かないと。

だって、ここは武士の国よ。

商館に勤める多くの者は、定められた勤務期間を終えると本国に帰る。その大半は帰国を心待ちにしているそうだ。特に、エミリーのように侍女として派遣された者は

嫌々で来ているケースも少なくない。言葉が通じないのだから仕方ないだろう。エミリーだって、この商館の外へ出たらエウロパが恋しくなるかもしれない。そんな簡単に、私から「これからよろしく」なんて返せる話じゃないわ。

「……どうして？」

「お忘れですか。私の弟は、マグノリア様の薬に救われました。ですから、今度は私がマグノリア様をお助けする番です」

「助けたって。そんな大袈裟な」

「大袈裟ではありません！　体の弱かった弟が外へ出られるようになったのは、間違いなくマグノリア様の薬のおかげです」

「エミリーは弟さん思いね。それならなおさら、ついてきてもらったのは申し訳ないわね。また何かあったらと心配にもなるんじゃない？」

「大丈夫です。病弱だったのが嘘のように、今は畑を耕してますよ」

リボンをきゅっと結んだエミリーの嬉しそうな顔が鏡に映った。本当に、弟さんが大好きなんだな。その顔を見ていると、出航の前日まで心配してくれた母や兄の顔が思い出される。

「でも、弟さんだってエミリーに会いたいんじゃない？」

「どうでしょうね。お嫁さんが来てからは、すっかり姉離れしちゃいましたし」

「それと家族は違うんじゃない？」
「そうかもしれませんが、マグノリア様にお仕えして世界を見てくるって言ったら、応援してくれました」
鏡越しだったけど、揺らがない瞳と視線が合った。
「そう……ありがとう。心強いわ。でも、国が恋しくなった時は言ってね。その時は、商館長に帰国の相談をするから」
「そんな必要ないですよ。……できました！」
さあと促され、視線を自分の髪形へと移す。
編み込まれた白いリボンはさりげなく、ボリュームのあった髪は綺麗にまとまっている。だけど、キリキリと結んでいないからとても楽だった。これはどう頑張っても、自分ではできそうにもない。エミリーがいなくなったら、髪を切るしかないわね。
「私がいなくなったら、この髪を切っちゃうおつもりですよね。そんなこと、させませんからね！」
お見通しだとばかりに胸を張るエミリーに、なんともいえない気まずさを感じた。だけど、そこには嬉しい気持ちもあって、胸の奥がほっとする。心強いというかなんというか。
「エミリー。これからよろしくね。……ところで、その手に持っているものは何かし

ら？」
髪形が仕上がったと言いながら、エミリーは小さな箱を手にしている。あれは間違いなく、母の持たせたアクセサリーケースだ。仕事をするのにアクセサリーはいらないと突き返したのに、どうやらエミリーに持たせていたようだ。
「あっ、バレちゃいました？」
「リボンだけで十分よ」
私の髪に宝石を飾ろうとしていたエミリーは、渋々といった様子でそれをドレッサーの引き出しに戻した。
それからエミリーのおかげもあって、商館の生活になれるまで数週間を楽しくすごせた。この調子で、行動範囲を商館の外へ広げないと。そう考えるようになった頃だった。
商館長室に呼び出され、ある事実を告げられた。
「どういうことですか、ドワイト商館長！」
商館中に響き渡るほどの金切り声を上げ、執務机に向かうドワイト商館長に詰め寄った。
開け放たれた窓の向こうで、羽を休めていた小鳥たちが一斉に飛んでいった。
私の横ではエミリーがおろおろとして、渋い顔をするドワイト商館長と私を交互に

見る。
「困ったもんだ」
溜め息をつくように低い声が零される。それはこっちの台詞だと噛みつきたくなるのを堪えようとしたけど、焦りと怒りを抑えることができそうにない
「私とエミリーの通行手形が発行されないって、それじゃ、商館から出られないじゃないですか！」
「今すぐは無理というだけだ。交渉はしている」
「期限がわからなければ発行されないも同然ですよね？」
「そうだが」
口籠るドワイト商館長の視線が泳いだ。
困るなんて悠長に構えている場合じゃないわ。大問題よ。
恒和国は交通網がしっかり整備されている。古い時代に内戦が続いたことで、軍事的、経済的にも整備が重要だったのだろう。要所で厳しくなった監視は、平和となった今でも続いているそうだ。
そんな人の往来を取り締まる場所が関所と呼ばれる場所で、当然、恒和国の外から来た私たちも、通るためには身分証の提示を求められる。それが通行手形だ。
ドワイト商館長の執務机をバンッと両手で叩き、身を乗り出すように詰め寄った。

商館長と私は親子よりも年が離れている。つまり、こんな強気に詰め寄るのは失礼に値する。でも、この時ばかりは焦りで頭がいっぱいになり、そんなことを気遣う余裕なんて欠片もなかった。だって、今すぐにでも外へ出て町の様子を見たいのに、いつ商館を出られるかわからないだなんて酷いわ。
「通行手形がないと、困ります！」
「……わかっている」
「私は恒和国で後ろ盾を手に入れないと」
「わかっている。侯爵夫人からの手紙で仔細を承知している」
立派な髭を撫でたドワイト商館長は、執務机に一通の手紙を置いた。そこには、見慣れたロゼリア様の美しい字が綴られている。
お優しいロゼリア様の微笑みを思い出し、鼻の奥がツンと痛くなる。
「でしたら、どうにかしてください！」
「わかっていると言ってるだろう。話は最後まで聞け！」
逸るなと苦言を呈したドワイト商館長は机に肘をつき、組んだ手に顎を乗せた。そうして、これ見よがしに深い溜め息をつく。
「そもそも、どうして手形が必要かわかっているか？」
「身分証のようなものと認識しています」

「そうだ。私たちは恒和国と交易を重ねてきたから信用も厚い。だから、今週中には新しく迎えた商人たちへの手形が交付される手筈になっている」
「交付されないのは、私だけってことですか？」
「あぁ、お前とエミリーだけだ」
「どうしてですか⁉　まさか、女だから」
言いながら、悔しさに胸の奥が締め付けられる。
どこへ行っても同じなのか。
女だからという理由で、学がない、仕事なんてできないと思われる。子どもを産んで着飾って男の華になればいいとさえ言われる。それが、女の仕事だと。
女としての自分を磨かず勉学に勤しんでいる。そう私を嘲っていた王立学校の貴族子女たちが脳裏をよぎった。その歪んだ笑みを振り払おうとすればするほど、胸の奥に暗い感情が湧き上がる。堪らず奥歯をギリッと鳴らした。
ドワイト商館長が静かに息を吐いた。
「この国は女性の数が少ないから、基本的には女性に対しての待遇が手厚い」
「……塀の中で安全に過ごせってことですか？」
「まぁ、そんなとこだ。どこの国も同じで、子を成す女は高く売れる。それを恒和国の政府は厳しく取り締まっている」

つまり、平和に見える恒和国でも人身売買はあって、そのターゲットとなる女性を守るために、女性が気安く移動することのないよう目を光らせているのね。
「私はこの国の女じゃないです」
「だが、他国の女性に何かあれば国家間での問題になる」
「薬師である前に、私は魔術師です。自分の身くらい、自分で守ります！」
「マグノリア、攻撃魔法適正マイナスだったろう？」
深々と溜め息をついたドワイト商館長は厳しい眼差しを向けてきた。それに思わずたじろいで口籠った。
痛いところを突かれてしまった。
そう、私は物質の分解や魔力の物質化は得意だけど、魔力そのものをエネルギーとして放つ攻撃に適性がない。そもそも私が有している魔力量が少ないため、攻撃魔法を連発なんてしたら、あっという間に魔力切れで気を失ってしまう。
私一人で探索に出るのが危険だっていうのは、恒和国に限った話でないのも十分にわかっているつもりよ。だからこそ、まずは協力者を見つけ出さないといけない。
しかし、私たちの生活をする関外町は、三角州に作られた異邦人の港町。この三角州を出るには橋を渡るしかないのだが、そこにも関所がある。関外という町名は関所の外にあるという意味らしい。

つまり通行手形がなければ、この町は恒和国の外も同じ。
「この関外町にある関所を通れなければ、外で協力者すら探せません！」
ドワイト商館長は低く唸る。
「だが、恒和国のルールに従わなければ、本国に戻されるだけだぞ」
「それを何とかするのが、商館長の仕事じゃないですか！」
「わかっている。……そこで、一つ提案だ」
「提案？」
「まずは、関外町の外に出るためだけの手形を手に入れる」
「それでは、他の関所は通れないんですよね？」
「この商館でくすぶっているよりはマシだろう」
「それはそうですが。私、ストックリーの痕跡も辿りたいんです。それには、白江城下に行く必要があります！」
「白江城下か……ここを治める栄海の大名は、半年おきに白江城下へ向かう。その時、我らも同行するのだが、お前も加えられるよう話してみよう」
「本当ですか⁉」
「だが、今すぐではない。何事も順番がある」
望みが見えたとたんに叩き落とされ、絶望に項垂れた。

最初から全てが上手くいくなんて思ってはいなかったけど、恒和国の中枢である白江幕府はまだまだ遠そうだ。
のそのそと顔を上げて姿勢を正す私を見たドワイト商館長は、やれやれと言わんばかりに小さく息を吐く。それから「そうがっかりするな」と励ましてくれるが、少なくとも今日は機嫌を直すことができそうにない。
「手形を手に入れる、手っ取り早い方法がある」
突然の言葉に驚いて瞬くと、ドワイト商館長は口元を緩めた。これは、何かよからぬことを考えている悪い大人の顔だわ。
「……何か、悪だくみしていませんか？」
「人聞きの悪いことを言うな。私の友人に会ってもらうだけだ」
「ご友人……恒和国の方ですか？」
「そうだ。ちょっと変わった御仁がいてな」
「変わった御仁？」
「お前のことを話したら興味を持ってな。ぜひ会いたいそうだ」
「でも、私は関外から出られない……」
言いかけてハッとした。もしかしたら、その御仁とやらが手形を発行してくれるのかもしれない。いやいや、商館長はさっきも期待させておいて、すぐさま私を叩き落

としたのよ。そう簡単に信じてなるものか。

商館長を睨むように見ると、悪い笑みを向けられた。

「我が友人は、この栄海藩を治めている大名の遠縁に当たる武士でな。まあ、隠居の身ではあるが、色々と融通が利く」

「――えっ？　大名って、上級貴族のようなものですよね？」

「そんなところだ。先々代の大名とは従兄弟関係だそうだ」

そんな大層な人物とドワイト商館長が、まさか友人関係だなんて思いもしなかった。つまり、その方は大名に近しい権力者ということね。交通手形を出せるのも納得できる。とすれば、この地方に精通しているはず。上手くいけば、私の後ろ盾に……っていうのは図々しいか。でも、あわよくば協力者の紹介をお願いしてもいいんじゃないかしら。

期待が膨れ上がり、気づけば商館長の悪い顔に笑い返していた。

「会ってみないか？」

「ぜひ！」

即答したら、下心満載なのがドワイト商館長に伝わったらしい。商館長は豊かな髭を指で撫でつけながらにやりと笑うと、後日、屋敷に向かうから同行するようにと言った。勿論、エミリーも一緒だ。

商館長の執務室を後にし、自室へと戻る廊下でふと中庭に面した窓を見た。そこには鮮やかな緑が広がっている。

「素晴らしく手入れの行き届いた薬草園よね」

「商館の食堂で使うお野菜も育てているそうです」

「薬に使うだけじゃないのね」

「マグノリア様、あそこにいらっしゃるのは、薬師の方ではありませんか？」

「そうね。薬草を摘みに来たのかしら……あら？」

庭で籠を抱えていた薬師と思われる二人に、見慣れぬ武士が近づいていた。何か話しているようだけど、薬師の一人がその場からそそくさといなくなってしまった。

「商人以外の方も、簡単に出入りできるんですね」

「診療所に来て迷ったのかもしれないわよ」

「……マグノリア様。あの薬師さん、困っているように見えませんか？」

「そうね。行ってみましょう！」

急いで中庭に向かうと、困り顔の薬師がこちらに気づいて顔をぱっと輝かせた。

「どうかされましたか？」

「そ、それが……彼らが何を言っているのか、さっぱりでして」

「通訳の人は？」

「今、呼びに行っています。でも、それすら伝わらなくて」
どうやら、この薬師は恒和国の言葉がわからないのね。商館には通訳がいるから、言葉がわからなくても働けると聞いていたけど、やっぱり多少は話せないと困ることもあるわね。
横を見れば、二人の武士も困った顔をしている。
通訳を呼びに行っていることくらいなら、私でも伝えられるかもしれないわね。
一度深く呼吸をして、足を踏み出した。
「あの、すみません」
「おお！　言葉の話せる者がおったか！　すまぬが人を探しておってな」
声をかけると、年上と思われる武士が大きく安堵した様子で私に向き直った。かと思えば、ペラペラと早口で何かを話し始めるではないか。
ちょっと待って。早くて聞き取れないわ！
恒和国の人たちが早口なのか。それとも、この人がやたら早口なだけなのか。
「ま、待って！　聞き取れないです！」
咄嗟に口をついて出たのはエウロパの共通語だった。それから思いつく限りの恒和国の言葉を混ぜて、早口だからわからないと伝えてみる。
武士は小さな目を見開くと、ぽかんと開けた口を閉ざした。そうして、横に立つ若い武士を振り返る。

「この女子は、な、なんと申したのだ？」
「言葉が聞き取れないと。高羽殿が早口すぎたようです」
ゆっくりと話す若い武士は、私をちらりと見た。
今、わずかだけど彼の言葉が聞き取れたわ。私の言葉を理解してくれたみたい！
私よりもずいぶん若く見えるけど、その姿は間違いなく武士。腰に刀を差しているし、着物もずいぶん品質がよく見える。年上の彼よりも家格が上なのかもしれない。
それにしても、二人ともとても艶やかな黒髪で、瞳も黒曜石のような輝きだわ。恒和国の人って、本当に黒髪で黒い瞳なのね。
二人を見比べていると、年上の武士が首筋をしきりに擦った。
「ゆっくり話せば伝わるか？」
「あー……私がわかる言葉は、少しです」
「相わかった」
「ありがとうございます。……困っているのは、なんですか？」
「ここに大層効く軟膏があると聞いて参った」
「軟膏……薬ですね」
断片的に聞き取れた。どうやら、この武士は薬を求めているようね。それだったら、

通訳を待たず、商館内にある診療所へ案内した方が早そうだ。
「医者のいるところは」
方角を指差して場所が違うと説明しようとした時だった。武士は「ぷれんてす殿を探している」と言った。
「今朝方、その者の薬が大層効くと聞いてな。しかし、医者にそのような者はいないと言われたので、困っておった」
「あー……えっと、たぶんそれ、私です」
もしかして、入港時に役人に渡した軟膏の話を聞いたのだろうか。
当然だが、この商館にいる薬師でプレンティス家の者は私だけだ。似たような家名の者もいないはず。とすれば、『ぷれんてす』というのは私のことになる。いないと言われたのは、商館の通訳が私の名前を把握していなかったか、思い出せなかったのだろう。私は新参者だから仕方ないわね。
自分を指差して、ぎこちない笑みを口元に浮かべると、武士は目が飛び出るんじゃないかってくらいに見開いた。
「藤倉殿！　腕のいい薬師は女子だと聞いていたが、どう見てもこれは男子の装束であろう？　もしや、騙くらかされておるのか。それとも、板木殿の聞いた話が嘘ということか？」

「落ち着いてください、高羽殿」
早口で捲くし立てる武士を、若い武士が宥めようとする。
それにしても、あまりの早口で、ほとんど聞き取れなかったわ。えっと、ふじなんとかって若い武士を呼んだわね。『おなご』は女の子って意味だったかしら。それと、騙す、騙される？　そんな言葉を聞いたような気がする。
あぁ、先輩からは、日常会話くらい大丈夫だろうって言われたのに。これでは全く会話にならないわね。聞き取れないのは致命的だわ。
私が小さく溜め息をつくと、武士は口を閉ざしてこちらを振り返った。同時に、庭の植木に留まっていた小鳥がぴちちっと鳴いて飛び立っていく。
勇気を出して話しかけたものの、言葉の壁は高い。
肩を落としている私を、年上の武士は疑わしそうに見て低く唸った。
「まことに、そなたが……」
「マグノリア・プレンティスです」
「女子の作った薬とは聞いておったが……はて、異国の女子は裳を履いているものではないのか？　あの娘のような」
困惑しながら何事か言って、武士は私の服をまじまじと見た。かと思えば、エミリーの方に視線を向ける。

言葉を半分も聞き取れなかったけど、この見比べられる感覚には覚えがあるわ。本国でも、同じようにひそひそと言う男たちが数多くいたもの。

「あ。あの、マグノリア様……私、何か失礼をしたのでしょうか？　恒和国の方々は、お怒りなのでしょうか？」

「違うわ。どうやら、私を探していたみたい。でも、私の服装を見て、人違いじゃないかって疑ってるのよ。女に見えないのかもね」

「……だから、ドレスをお召しになってくださいと申したのです！」

ぷるぷると震えたエミリーは拳を握って声を上げた。これ幸いと、私にドレスを着せるつもりじゃないかと懸念が生じたけど、今はそんなことを言っている場合じゃない。

エミリーの勢いに気圧されながら横を見ると、武士たちも一歩、後ずさっていた。

「その話はまた今度にしましょう。貴女の剣幕に、彼らが圧倒されてるわよ」

知らない言葉で怒鳴られたら、私だってたじろぐわ。たとえ、自分に向けられた怒りでなくてもね。

一つ咳払いをして、私は彼らに再び声をかけた。

「私は女で、薬師です。この姿は、その……」

動きやすいから男装をしているって、どう伝えたらいいのだろう。言葉に詰まって、

開きかけた口を引き結ぶ。服装の説明をどうするか、次までに考えておかないといけないわね。

それにしても、困ったわ。

言葉に詰まって小さく唸ると、若い武士が口を開いた。

「武家の娘が男児として育てられた話を聞いたことがあります」

「おお、なるほど。お家の事情で男児として育てられたという話は、私も聞いたことがある。相わかった」

何を言っているのか、さっぱり聞き取れなかった。だけど、若い武士が助け舟を出してくれたのは、なんとなく理解できた。

眉間にしわを寄せる彼は、ちらりと私を見る。にこりとも笑わないけど、敵意はなさそうね。とりあえず、誤解は解けたのかな。

だけど、この調子では薬を必要としている人が誰なのか、状態を知ることもできなそうね。やっぱり、医者のいるところに連れていく方がいいかも。

困っていると「お待たせしました」と声がかかった。振り返ると、通訳の男性が立っていた。

もう少し早く到着してくれてもよかったのよと、口をついて出そうになった文句をぐっと呑み込んだ。

「エミリー、会計の人を呼んできてくれるかしら？　調合部屋で彼らの話を聞くから」
「わかりました！」
「通訳さん、彼らが薬を欲しいと言っています。通訳をよろしくお願いします」
「了解しました」
温厚な笑みを浮かべた男性は、武士たちに自分が通訳として間に立つことを説明してくれた。それからすぐに、彼のおかげで状況を把握することもできた。
武士の話をまとめると――。
「貴方が懇意にされてる蕎麦屋の娘さんが火傷痕を気に病んでいるから、その痕を治す薬が欲しいのですね」
「どうにかできないもんですかね？」
「実際の火傷痕を診た方がいいのですが……」
「やはり、そうですか」
困り顔で武士、高羽弥吉はつるりとした顎をさすると、溜め息をつくようにふんっと鼻で息を吐いた。
「見られたくないと言って、外に出ようとしないんです。無理に引っ張ってくることもできやしませんしね」

「だから、薬だけでも欲しかったと？」
頷いた弥吉さんは少し視線を逸らすと、それにと話し続けた。
「火事に巻き込まれた蕎麦屋は、周りの助けもあって再起したんですがね。懐事情がよくないようで」
「……支払いを心配している、と」
「つまりがそうなんですが……三ヵ月前、火傷を負った時の薬がよくなかったんですかね。なんとかなりませんか？」
薬の出来も気になるけど、当時の処置がどうだったのかも気になる。もしかしたら、ずさんだったのかもしれない。
恒和国で医者の診療は薬の値段の何十倍、下手をすれば何百倍もするそうだ。庶民がかかれる診療所もあるらしいが、常に満員と聞いたこともある。それを考えたら、医者に診てもらうのを諦める人がいるのも頷けるし、処置がずさんなこともあり得る。
この商館にある診療所は法外な金額を請求しない。だけど、異邦人の医者に診られるのは勇気がいるだろうし、娘さんを連れてこさせるのは難しそうね。
「私が払うと言ったら、そこまで世話をかけられないと、蕎麦屋の旦那も断ってきたんでね」
「だから、せめて薬を買って届けたいと考えたんですね？」

「はい。……蕎麦屋の娘は十五になったばかりでね。これからいい出会いもあるだろうに。私にも十を迎えた娘がいるんで、それを思うと……」

頷いた弥吉さんは切々と語った。

他人の娘まで思いやるとは、なんという人のよさだろうか。これが所謂、人情というものか、はたまた親心か。出産どころか結婚すらしていない私には、到底想像もつかない心意気ね。

ふと首筋に視線を感じた。横を見ると、話を聞いていた通訳も涙ぐんでいるではないか。まぁ、同情したくなる気持ちはわかるわよ。同情して火傷痕が消えるなら、世話ない話だけど。

火傷か。色素沈着を軽減させるには時間がかかるけど、魔法薬なら早めることもできる。実際に見たいところだけど、話を聞く限り無理そうね。

「三ヵ月前の火傷……場所は？」

「額のあたりなんですがね。白粉を塗っても、うっすら見えるって気にしちまうんですよ。痘痕もえくぼって言いますから、惚れた男は気にしやしないって言ったんですが、駄目でしてね」

額をちょんちょんと指差した弥吉さんを見て、なるほどと思う。そんな目立つ場所に火傷痕が残ったら、さすがの私だって気にするわ。

火事の際、落ちてきた材木の破片にでも当たったのかしら。

三ヵ月前といえば、恒和国はまだ冬の寒さが残っていた時期だろう。木造家屋が並ぶ街並みだし、一気に火の手も広がったのではないか。怖かっただろうな。

想像しただけでも、背筋が震えた。

私は無意識に顔をしかめていたのかもしれない。弥吉さんが「ぷれんてす殿？」と不安そうに声をかけてきた。

「やはり古い火傷は、難しいですかね」

「いいえ。多少、時間がかかっても改善は可能だと思います」

「見なくてもわかるんですかい？」

「できれば、見た方がいいです」

苦笑を浮かべながら席を立ち、薬を納める保管庫の鍵を外す。中から取り出したのは保湿液の瓶と、軟膏の小さな壺だ。どちらも私の魔力を付加してある魔法薬になる。

それぞれの効果を説明すると、弥吉さんは感嘆するように長い息を吐いた。

「ぷれんてす殿は医者ですかい？」

「薬師ですよ。医者のように直接の治療は無理です」

「直接の治療とはなんですかね？」

「たとえば、傷を縫い合わせたり、体内の悪いものを切除したり等の行為ですね。さ

て、これから薬の使い方を説明します。きちんと覚えてくださいね」

医者と薬師の違いは他にも多々あるが、ここでその説明をする必要もないだろう。話題を変えるべく、私は弥吉さんの前で薬の蓋を開けた。

「手を失礼します。まずは火傷痕の箇所を綺麗に洗ってから、この液体を優しく塗ります」

弥吉さんの手首を掴み、用意した濡れタオルでその甲を拭った。それから保湿液を垂らして指で広げ、軽くとんとんと押さえるようにして肌へ馴染ませる。それから、軟膏を指にすくうと重ねて塗った。

私の行為を、弥吉さんは眉間にしわを寄せながら見つめていた。息をするのも忘れてしまいそうな様子で、取りこぼすことなく覚えようとしているのが伝わってくる。本当に、蕎麦屋の娘さんのことを大切に思っているのね。

「こうして軟膏を塗りましたら、上から綺麗な布を当てます。それを毎日、朝と晩に行います」

「それだけですかい？」

「はい。一ヵ月後、できれば蕎麦屋の娘さんをここに連れてきて、医師の診療を受けてください。状態を見れば、より適した薬を作ることも可能ですから」

「相わかった」

ほっと安堵の息をついた弥吉さんは、深々と頭を下げ「お代はいくらですかい」と尋ねた。すると、丁度よく部屋を訪れた会計が私に代わり、話を続けることになった。

娘さんの気が変わって、ここを訪れてくれればいいんだけど。そんなことを考えながら、私は薬の処方記録を魔法書に残した。

約束の日、私はドワイト商館長に連れられて、関外町から離れた屋敷を訪れた。

商館長の古いご友人と会う約束を理由にしたら、すんなりと関外町から出るための手形がすんなり手に入ったのは驚きだった。それだけ、これから対面する人物は重鎮なのだろう。あるいは、商館長がすごい人なのかもしれないし、その両方かもしれない。

訪ねた屋敷は周辺の建物とは明らかに作りが違った。

立派な門と白塗りの壁を越えた先にあった建造物を見た瞬間、脳内でストックリーの恒和国滞在記にあったスケッチが蘇った。どっしりとした立派な木造家屋の存在感を前にしたら、いくら恒和国の建築に疎い私だって、ここに住む人が庶民でないことくらいわかる。

ドワイト商館長に倣ってブーツを脱ぎ、屋敷へと上がった。

案内された板張りの床を進むと、広い庭が視界の横に映った。

なんて美しい庭だろうか。整えられた庭園は、季節の花木がただ美しいだけの景観ではない。池まで丁寧に作られている様がなんとも贅沢だ。

池の中央にある小島へかかる石橋も洗練された形をしているし、水面に映る青々とした葉の美しさがとても心地よく目に映る。きっと、秋になれば葉が赤く色づくのだろう。その移り変わる姿をぜひとも見てみたい。できることなら散策して、あの石橋も渡ってもみたい。

案内してくれる武士の後ろで感嘆の息をついていると、奥の部屋へと通された。

何もかもが初めてで感動が尽きない。

これが畳か。歩いてきたヒヤリとする板貼りの床と違い、カーペットがなくても心地よいぬくもりを感じる。ほんのりと草の香りがするのも、自然の香りに包まれるようで落ち着く。畳なら直に座ることができるという話も納得だわ。

腰を下ろして横を見れば、そこに美しい庭園を望むことができた。視線が変わったからだろうか。歩きながら眺めるのとは違う景色が目の前に広がる。四角い枠に収まるその景色は、まるで絵画のようだった。視線を変えただけで、これほど味わいが違うのだから、寝そべったらまた違う姿を見せてくれそうだ。恒和国では椅子に座る文

化がない理由を、なんとなく知れた気もする。

庭だけではない。素足で進んだ板の間に畳、見るのも触れるのも初めてずくめ。今まで得たことのない感覚に気持ちはますます浮かれていった。

物思いに耽っていると、一人の武士が現れた。黒い羽織をかけたその人は深緑の着物に袴姿で、見たところ五十歳を超えたくらいのようだ。まさか、この人がご隠居様じゃないわよね。

どなたかしらと思っていると、私の横に座るドワイト商館長が「久しぶりですな」と声をかけながら腰を上げた。私も慌てて従おうとしたけど、武士は「よいよい」と言って向かいに座った。

「儂とお主の仲ではないか。堅苦しい挨拶はいらぬ。楽にしてくれ」

物腰の柔らかそうな武士は、私を見てにこりと微笑んだ。

「そちらが件の薬師殿か？」

もしかしなくても、二人の会話から察するに、この人がドワイト商館長のご友人なのだろう。隠居されているって話だけど、そんな年には見えないわ。

私がぽかんとしていると、ドワイト商館長がわざとらしく咳払いをした。

「マグノリア、こちらが藤倉兼明様だ。ご挨拶を」

「は、はい！　マグノリア・プレンティスです。このたびは、通行手形の交付をあり

がとうございました」
「ははは っ、手形がなければ、こうして会うのも難しいからな。会えて嬉しいぞ」
使い慣れない恒和国の言葉で挨拶をすると、藤倉様は嬉しそうに答えてくれた。ゆっくり話してくださるのもあって、なんとか聞き取れる。それが嬉しくて、感動で胸を震わせていると目の前に茶器が差し出された。
こちらでは、茶室という場所でお茶を楽しむと聞いたことがある。これがそうなのかしら。
持ち手のないカップの横には、花をかたどったお菓子が添えられていた。何もかもが物珍しくて、まじまじと眺めていると、藤倉様は喉の奥で笑いを堪えて私を呼んだ。
「マグノリア殿、煎茶は初めてかな？」
「え？　あの、これが……茶の湯ですか？」
「茶の湯に興味がおありだったか！　では、次は茶室に案内せねばならんな」
「これは、違うのですか？」
「うむ。茶の湯は少し違うて、堅苦しいものだ」
「私は抹茶より、煎茶の方が飲みやすくて好きですな」
「商館長……あれ、とは？」
「ははは っ！　マグノリア殿はなんにでも興味がおありだな。まぁ、今日はこれで勘

弁願おう。ゆっくり飲むがいい」
楽しそうに笑った藤倉様は、自分の湯飲みに口をつけてずずずっと啜った。
音を立てる様子に驚かされ、再びぽかんと見ていれば、横で商館長もふーふーと息を吹きかけた後、ずぞぞっと啜り出したではないか。
なんてことだろうか。私たちの国では、紅茶を頂くのに音を立てたら行儀が悪いとされるのに、恒和国では気にしないようだ。
文化の違いに目を白黒させていると、藤倉様は穏やかに話しかけてくれた。
「女子の薬師が来るとは驚いたぞ」
「予定していた薬師が体調を崩しまして。うちの船に出資をしてくださる侯爵様の紹介で決まりました」
「長い船旅で病になっては一大事。若く健康であることは、何よりもの才であろう」
「ごもっとも。それに、マグノリアは研究熱心な薬師です。ストックリーにも負けないでしょうな」
「ストックリーに負けないとは、なかなか大きく出たな！」
「いやいや、これからは女子も活躍する世になりましょう」
「なるほど、マグノリア殿はその先駆者といったところか」
大口を開けて笑う藤倉様ははつらつとした様子で、隠居をされているなど微塵も感

じさせない。後で聞いたのだけど、六十歳を迎えていて、すでにお孫さんが七人もいるらしい。恒和国の人たちは童顔だと聞いていたけど、本当のようね。

でもこの時の私にとっては、藤倉様の若さよりも、植物学者ストックリーが話題に上ったことの方が衝撃だった。

「ストックリーをご存じなのですか？」

「若い頃、少しだけ交流があったのだよ」

思わず前のめりになって尋ねると、藤倉様は懐かしむように目を細めた。そうして、ゆっくりと思い出を噛み締めるように語り始める。

「儂は五男でな。若い頃は奔放な生き方をしておった。そのおかげでストックリーと出会い、さらにはドワイトと長年の交流を持つに至った。こうして異国の言葉を話せるようになったのも、長年培ってきた友好の証であろう」

「ははは、こんな無茶苦茶な会話は、我らの間でしか通用しませんけどね」

「むむっ。やはりエウロパでは通用せぬか？」

「私と藤倉様の間だけですよ。まぁ、マグノリアも多少は聞き取れているようですが」

にやりと笑うドワイト商館長と視線が合い、なんだか違和感を覚えた。いいえ、この違和感は今さらじゃない。そう、藤倉様が話しかけてきた時から何か引っ掛かりを

感じているのよ。

少し首を捻って二人の会話を思い返してみた。断片的に聞こえてきた恒和国の言葉とエウロパの言葉……はたと気づいて座敷を見渡した。

そうよ、ここには通訳がいないんだわ。

にやにや笑いながらドワイト商館長は「時間はかかりましたな」と言った。

「恒和国の言葉がわかるのは交流を重ねた商人くらいでしょうな。本国では恒和国を、おとぎの国とさえ思ってますからな」

「なんと。実存すら認められてないのか」

「それどころか、一部ではハラキリ民族は野蛮だと、真しやかに語る輩もいますぞ」

「聞き捨てならぬな」

「我々の文化に切腹なる処罰はないので、衝撃が大きいのでしょうな」

「ふむ。やはり、もっと交流を深めるべきだな」

二人の会話に耳を傾け、じっと聞くことで違和感の正体に気づいた。。エウロパと恒和国の言葉が上手いこと織り交ぜられているんだわ。そのおかげで、私もなんとなく会話がわかるのだろう。でも、これって誰もができることじゃないわね。

なるほど、長年培っていた友好の証か。

私が一人で納得している傍らで、二人の会話はますます弾んだ。

「お互いの国で言葉を教え合えば、交流も進むでしょう。しかし通訳たちは仕事がなくなると言って渋りますな」
「こちらも同じようなものだ。大陸への警戒心が強い分、余計に厄介だな」
困ったものだといって顔を見合う二人だけど、悲壮感はない。むしろ楽しそうだわ。
「マグノリアのように異文化へ興味を示し、学びたいと強く思う若者がいるのが救いですな」
「うむ。マグノリア殿は、どのくらい恒和国の言葉がわかる？」
「はい……先日、恒和国の方と話す機会がありましたが、藤倉様のようにゆっくり話していただけず、聞き取るだけでも難しかったです」
「やはり、そなたもか」
「……え？」
今、藤倉様はなんと言っただろうか。
聞き間違いでなければ「貴女も同じか」と言ったのよね。それは、藤倉様の過去と比べてということかしら。でも、それなら「私もそうだった」と言うわよね。もしかして、他の誰かが私と同じように感じているってことかしら。
汲み取れないニュアンスに、些細なもやもやを感じて首を傾げた時だった。
「お祖父様、遅くなりました」

聞き覚えのある声が後ろからかけられた。振り返ると、そこに見覚えのある若い武士が立っているではないか。
一瞬、目が合った。だけど彼はにこりとも笑わずに少し頭を垂れただけだ。その動きを目で追い、数日前にあった若い武士の姿を重ねた。
間違いない。彼は商館で出会った二人連れの武士、その片割れだわ。思い返せば、もう一人に「ふじなんとか」と呼ばれていた。あれは、藤倉殿だったのね。
だけど、どう言葉をかけたらいいかわからず、相槌を打つように挨拶するに留まった。
彼が座敷へ上がり藤倉様の傍に腰を下ろすと、優しい衣擦れの音が響いた。
少しくすんだ薄緑色の小袖に、袴と羽織の藍色が彼の落ち着いた雰囲気にとても合っている。
恒和国の色というのは、自然の植物にとても近い。少しくすんでいるようだけど、それがある種の味わいになるのね。彼の黒い瞳やその艶やかな黒髪も相まって、まるで静かな夜のように見えた。
「薬師殿。先日はお世話になりました」
耳に触れる少し低めの声に鼓動が跳ね、私は無意識に口をぽかんと開けていた。
予想していなかった言葉かけに、驚きが隠せなかった。だって、信じられないこと

に、彼が口にしたのはエウロパの共通語、それもとても綺麗な発音だったんだもの。
バクバクと鳴る鼓動の中、言葉を返すのも忘れて彼を見続ければ、その表情がわずかだけど困惑に染まった。黒い瞳が逸らされ、大きな手は首筋の後ろを擦って戸惑いを表す。
しんと静まり返る室内に、ドワイト商館長のわざとらしい咳払いが響いた。
ハッとして横を見れば、にやりと笑う顔があるではない。なんだか、悪戯を仕掛けた子どもみたいな顔だわ。もしかして……仕組まれた？
驚きの再会は、否応なしに私の鼓動を速めていく。耳まで熱くなってきたし、きっと頬は赤く染まっているだろう。
「伝わらないようですね。やはり、話すのはまだ」
「いいえ！　伝わっています！」
再び聞こえた声に慌てて返すと、切れ長の瞳が少し見開かれた。
だけど、ほっと安堵したように「よかった」と頷いた彼は、それ以上話さなかった。だから今度は、私の胸の内に不安が押し寄せ、どうしたらいいのかと居心地悪くそわそわするようになった。
緊張で手に汗をかき、視線の合わない彼が気になって仕方ない。
私から何か話しかけた方がいいのだろうか。恒和国の言葉を試すチャンスよね。こ

こは勇気を出して話さないと。何か話題をと探していると、ふと疑問が浮かんだ。
彼は商館で私と出逢った日に、エウロパの言葉を話さなかった。なのに、さっきは確かに綺麗な発音で礼を言った。もしかして、あの時も話そうとすれば話せたのかしら。それなら、あの時も助けてくれたらよかったのに。
ああ、でも、私だって今こんなに話しかける勇気がもてないでいるんだから、お互い様かしら。
悶々（もんもん）としながら、ちらりと彼を見た時だった。突如、藤倉様が大きな口で笑い出した。それに釣られたのか、ドワイト商館長も噛むようにして笑いを堪え、肩を震わせる。
やっぱり、ドワイト商館長は彼のことを知っているのね。藤倉様に縁のある人で、さらに言葉が通じるってことも。知っていて、黙って会わせたんだわ。
「……商館長、これは、どういうことですか？」
「お前が言ったのだろう。協力者が欲しいと」
「状況が理解できません」
「ドワイト、マグノリア殿に説明をしておらなかったのか？」
「その方が面白い……いいえ、事前に知っていたら、よそよそしくなるかとも思いましてな。打ち解けるのに、丁度いいきっかけになりましょう」

今、面白いって言いかけたわね。

疑いの眼差しをドワイト商館長に向けてみたけど、すっとぼけて視線を逸らされた。

つまり、私と彼が商館で会っているのもドワイト商館長は知っていたし、彼がここに来ることを黙っていたのは私を驚かせて話題にするためだった。

ずいぶんと子どもじみた悪戯ね！

「そう膨れぬな。可愛い顔が台無しだぞ、マグノリア！」

「なんですかそれ？　教えてくれてもいいのに。よそよそしくなんてなりませんよ！」

「さて、どうだかな」

「ドワイトは昔から、そういう悪戯が好きだな。配下は苦労するの」

「えぇ、本当に！」

私に気を使ってくれる藤倉様だけど、ドワイト商館長の悪戯は気に入ったようで、ずいぶん愉快そうだ。この二人、もしかして似た者同士なのかも。

子どもじみた悪戯には困ったものだけど、不思議と緊張が解けている。それが少しだけ癪に思えたから、これ見よがしに大きな溜め息をついた。すると、咳払いをした藤倉様が私を呼んだ。

「マグノリア殿、これは孫の春之信だ。儂の影響もあってエウロパに興味を持っている」

藤倉様の傍らに座る彼は「藤倉春之信です」といって頭を下げた。でも、それだけでまた口を閉ざしてしまう。

藤倉様はやれやれと呟き、少し眉間にしわを寄せて肩をすくめた。

「エウロパの言葉を話すのは難しいと言うのだが、儂から見れば、これに勇気がないだけに見えてな」

「……勇気ですか？」

「そうだ。春之信は、儂より言葉を知っておる。足りないのは勇気に他あるまい」

「春之信殿は幼き頃より、私にも言葉を教えてほしいと頼みに来ましたな」

懐かしむように口を挟んだドワイト商館長は、春之信さんへ穏やかな眼差しを向けると「幼い頃よりとても勤勉でしたな」と頷く。

商館長と藤倉家の付き合いは、そんなに長いものなのね。

少し羨ましい気持ちを抱きながら、ちらりと藤倉様の孫、春之信さんの様子を見た。

二人がこんなに褒めているのに、嬉しそうな顔一つしていない。

「そのおかげか春之信は、儂より話すのも上手い。きちんと聞き取れただろう、マグノリア殿」

「はい。とても綺麗な発音でした」

頷けば、藤倉様は満足そうに笑みを浮かべる。きっと、自慢のお孫さんなのだろう。その様子が少しだけ羨ましく感じられた。

「儂とドワイトが初めて話した時は、全く会話にならなかったものだが」

「当時は通訳もまだ少なく、苦労しましたな」

「しかし、それもよい思い出だ」

懐かしむ二人の笑顔から、交流の日々で得た充足感が伝わってくる。それは、私が望んでいる異文化交流の姿そのものだ。

憧れをこめて「羨ましい限りです」と言えば、藤倉様とドワイト商館長は顔を見合わせた。

「春之信にも交友の喜びを知ってもらいたくてな」

「そこでだ。マグノリア、お前が望んでいた協力者を春之信殿に頼むことになった」

「……え？」

突然の話に、頭がついていけなかった。

今日ここに来た目的は、ひとまず関外を出るための手形を頂けたお礼だと思っていた。あわよくば、協力者の紹介をお願いしたいと考えていたし、そのタイミングを密かに探ってもいたけど。

春之信さんの様子を見たけど、その表情は一つとして変わっていない。つまり、彼

は事前に話を聞いているのだろう。

「恒和国を散策するのに、通訳を兼ねた供が欲しいのだろう。春之信はうってつけではないか？」

「マグノリアは、度胸だけは人一倍ある。きっと、春之信殿にいい影響を与えるだろうし、悪い話じゃない。どうだ？」

度胸だけって、それ、褒めてませんよね。

ドワイト商館長に一言物申したくなりながら、私はぐっと口を引き結んだ。

遊ばれているような気もするんだけど、悪い話ではない。むしろ好条件すぎるわ。言葉が通じるだけじゃない。これだけ立派な武家のご子息なら、そうそう変な輩に絡まれることもないだろう。それに何よりも、言葉を教わるチャンスになる。断る要素なんて一ミリもないわ。

「如何かな、マグノリア殿。孫をそなたの恒和散策の供にしていただけるかな？」

「こちらこそ、よろしくお願いします！　あの……春之信さん、私に恒和国の言葉を教えてくれますか？」

勇気を出して尋ねてみると、彼は静かに「相わかった」と返してくれた。どこか憮然としてとっつきにくい感じがするけど、怒ってるわけではない……よね？

お礼を返しながら春之信さんの反応を見たけど、それっきり、私たちだけでは会話

が続きそうになかった。

春之信さんは話し下手なのかな。私から何か話題を振るべきなのか。そわそわとしながら、もう一度話しかけてみようと口を開いた時、藤倉様が助け舟を出すように春之信さんへ声をかけた。

「春之信、お前もマグノリア殿にエウロパの言葉をさらに教わればよかろう。どうかな、マグノリア殿？」

「――？　勿論です。お互いに学べたらいいと思います」

「うむ。まことに賢い女子だ。春之信は、少々言葉の足りぬところがあるが、気にせず話しかければよい」

藤倉様はご機嫌な様子で頷くと、ところでと話題を変えてきた。

「マグノリア殿は、ストックリーに興味をもっておると聞いたが」

「はい。ストックリーが旅をした恒和国を訪れるのが、長年の夢でした！」

「であれば、白江城下へも行ってみたいのではないか？」

突然の問いかけに、私の心臓がどきんと跳ね上がった。

勿論、いつかは白江城下に行きたいと思っている。

白江城下の大名屋敷にストックリーが出入りしていた記録もあるし、彼が訪れたという城下の書庫へも行ってみたい。彼と同じように恒和国の文化を隅々まで見ることができたら、どれほど幸せなことか。

頷くだけではこの期待に満ちた感情を表せない。

大きく息を吸って、精いっぱい、恒和国の言葉に気持ちをのせた。

「行ってみたいです！」

少し驚いた顔をした藤倉様は、すぐさま満足そうに笑うと「では、一つ策を授けよう」と言って、不敵な笑みを浮かべた。

「……策？」

「女子であるマグノリア殿が、ただ行きたいと志願しても大名行列に並ぶのは難しかろう。だが、あちらが来いと申せば話は別だ」

「あちらから？　あの、どういう意味でしょうか？」

「白江城下にある大名屋敷には、栄海藩の奥方が住まわれている。奥方がマグノリア殿に会いたいと申せば、殿も同行を許されるであろう」

なるほどと頷いてみたものの、何をしたらいいのかさっぱり思い浮かばない。

だって、その奥方様と私はお会いしたことがないのよ。私のことなんて知りもしないだろうし、異国の薬師に会う理由なんてないだろう。大名の奥方なら、専任の医者や薬師がいるに決まってるもの。

つまり、特別な理由が必要ってことかしら。